

# 十二支の「七ツ目」に関する俗信

腮尾尚子

A Superstition on "the Nanatsume" of the Chinese Zodiac Calendar

はじめに

- ① 七ツ目信仰の諸相
- ② 七ツ目の十二支獣を尊ぶべき根拠
- ③ 田沼意次と七ツ目信仰
- ④ 七ツ目の支に関する俗信  
終わりに

## 【論文要旨】

十二支・十二支獣に関する俗信の一種に、江戸時代後期に盛んに行われた「七ツ目信仰」がある。これは、自己の生まれ年の十二支から七ツ目の十二支——子歳生まれなら午——の動物を絵像にしまつると、幸運を授かる、という俗信である。この七ツ目信仰は、現在すっかり廃れ、そればかりか、かつて存在していたという事すら忘れられている状態である。このため、七ツ目信仰を題材とした江戸時代の文学・美術作品の解釈をするのに、支障が生じている程である。

本稿では、江戸時代後期における七ツ目信仰の実態を、絵画資料も活用しつつ、紹介するという事に重点を置く。七ツ目の支獣は、一種の神であり、その加護を受けるために、前述の七ツ目獣の絵像の他、七ツ目獣をかたどった家具や小物なども用いられていた。

当時、月日や方位を表す十二支についての吉凶説では、ある支とその七ツ目の支の組み合わせを、縁起の悪いものとして断じていた。七ツ目信仰は、このような吉凶説

と根本的にくい違うもので、人々の中には、なぜ七ツ目の獣を礼拝するのか納得のいかぬ者もいたようである。

しかし、このような矛盾を抱えていたにもかかわらず、七ツ目信仰は、特に安永・天明期を一つの山として流行した。七ツ目信仰が人気を集めた原因としては、時の人であった田沼意次が七ツ目獣を信仰していると噂されていた事が挙げられる。田沼家の紋は七星を表す❁であるが、これが別名「七ツ梅」と呼ばれており「七ツ目」を人々に連想させ易い素地をもっていた。

隆盛した七ツ目信仰の辺縁には、生年の支が七ツ違いである男女は相性がいいという俗説も新たに生まれた。

七ツ目信仰は根拠不明の俗信にすぎないが、これがかつて社会現象ともいえる程のブームを形成した事を考えれば、文化史上、現状の如く看過されてよいはずはない。